

「現地を訪問して想うこと」 (2012. 10/13~14 岩手県コースに参加して)

先ずもってこのような企画を設定して下さった母校校友会の英断に敬意と感謝の意を表します。私自身は昨年は是非行きたいと思いつながら果たせず、忸怩たる思いをしていたところでしたので即参加を決めました。実際に現地をこの目で見ましたが本当にあの映像で見た津波が町を破壊して行った生々しい現実が本当にあったのかと疑いたくなるようなリアス式の美しい海岸と穏やかな海のギャップに戸惑いました。

未曾有の大災害発生から1年と7ヶ月が経過しましたが、海岸近くのもと在った人々の生活の場は草むして、いつここに又賑わいが戻るのか、これからの復興への道のりがいかに険しいものであるかを想像させました。現地校友から聞いた話では災害直後にはいち早く地元不動産業者が高台の山林を買い占め、今では3倍以上の高値になっていて行政が考える住民の高台移転計画が進まないとか。

又最近では復興への歩みに地域間格差が生まれてきているとのこと。茨城から東北にかけての海岸線全域に近い広範囲な復興需要が一斉に生まれた為に建設機械や作業者の確保が追いつかず、建設業者などは作業効率が良く単価の高い仙台地区など大都市に近いところに集中し、岩手県などの田舎の被災地にまで手が廻って来ない状況が生じているとのこと。いくら復興の為に財政手当をしても本当に現地の方々がどんな困難に直面しているのか、何が復興を阻害しているのかを見極めるのは中央の政府では難しい筈。今回のような非常事態時には地元密着した市町村や県に大幅な権限移譲を素早く決定するべきであると痛感した。政治の責任は大である。

何れにしてもあの美しいリアス式海岸こそが東北の自慢であり、観光資源であると共に生活の糧をもたらす豊饒の海であることは今後も変わることはありません。海岸線に住まう人々の生命、安全の確保と同時に生活の糧となる水産業の復活は復興事業の最重要命題であります。これだけの広範囲に亘る地震・津波災害とそれに追い打ちを掛けた福島原発事故災害からの復興、復旧には恐らく10~20年いやそれ以上かかるでしょう。

その間に我々が被災地に対して出来る支援は個人、団体を問わずあらゆる局面、段階に応じて無限に考えられると思いますので今回の訪問を第一歩として常にその事を忘れない様にして息の長い支援をしていきたいと肝に銘じています。

立命館大学という今や全国私学の中でも規模、優秀性においてもトップレベルの大学がこのような応援ツアーを他に先駆けて企画、実践したという事実は大変意義深いものがあり校友の一人として誇りに思います。これを機に他の大学や企業がこういう支援活動を見做えば被災地の活性化に一層弾みが付くものと期待しています。今回企画、お世話いただいた校友会事務局、現地校友会の皆さま本当にありがとうございました。

2012年10月20日

外村敏一

(1971年 経営学部卒)